

幕末の英雄「坂本龍馬」後の 坂本家の人々——

坂本家九代目当主は小平にいらした！



坂本家九代目当主 坂本登さん



農民画家 坂本直行さん (1906～1982)
坂本家八代目当主

「龍馬と私の共通点ですか？まあ背丈が同じことくらいですかね」と笑うのはかの坂本龍馬を生んだ、坂本家九代目当主である、坂本登さん（73歳）。威風堂々たる体躯に比して大変物腰柔らかな方だ。小平在住40年余りになられる。

「小平に坂本龍馬の子孫がいらっしやる、そしてその父上は画家だったらしい」という話を聞いたのは6月のことだった。驚いた私は調べてみても、驚いた。画家というのは以前からその絵の一ファンだった坂本直行（なおゆき1906～1982）であった。北海道銘菓、マルセイバターサンドやホワイトチョコで名高い、帯広「六花亭」の包装紙を描いた方である。エンレイソウやフキノトウなど北海道の山野草がいっぱい描かれた包装紙は誰もが知っているだろう。私はあの絵を

目にただけで、20代の2年間を暮らした帯広に思いを馳せ、懐かしさに満ちる。

3年前帯広に向いた時、オープン直後の中札内、六花の森「坂本直行記念館」を訪ねたことがある。日高峰を描いた清澄で温かい絵の数々、農民画家として知られた直行さんの骨太な生き方に改めて感動した。だから一層今回の偶然で、過去と現在とがつながったような不思議さを感じる。北海道の坂本直行さんが坂本家八代目当主であること。そしてその長男である登さんが九代目にあたり、小平に住んでおられることを。

北の大地で龍馬の志を継いだ坂本家の人々

坂本龍馬の父、八平が郷土坂本家

の3代目にあたり、その長男であり、龍馬の兄である権平が4代目。権平は龍馬の姉、千鶴の次男である南海男（なみお、後に直寛と改名）を少年期に養子にし、坂本家を継がせた。この直寛の孫が直行さんで、登さんは曾孫。つまり直行さんは龍馬の甥の孫ということになる。

龍馬と妻お龍の間には子どもがいなかったが、龍馬没後の（明治4）1871年維新の功労者である龍馬の系統が途絶えるのを防ごうと、朝旨により、姉千鶴の長男、高松太郎が「坂本直（なお）」として龍馬の跡目を継いだ。坂本直は数人の養子縁組をして、その中の直衛が家督を継いだようだ。直衛にも実子がいなかったのか、後に断絶していた龍馬家を直寛の長男、直道が継いだ。しかし残念なことに直道には2人の子どもがいたもの



現在の坂本家の人々 左側 母ツルさん、四男宏さん
右側 手前から次男嵩さん、長男登さん、五男勲さん、その前が長女直美さん

の、跡継ぎがなく、龍馬から数えて5代目でその直系は途絶えている。

それではどうして、土佐の郷土坂本家が北海道に渡ったのだろうか？ 龍馬は蝦夷地（北海道）の開拓を目指していた。左幕派と倒幕派の無用な争いを避け、そのエネルギーを新天地で活かそうとしたと言われている。33歳で暗殺された龍馬は蝦夷地開拓という

宿願を果たすことはできなかったが、その思いは甥で、後に龍馬の跡目を継いだ坂本直から、実弟で、坂本家五代目の直寛へと引き継がれていく。

坂本直は龍馬亡き後、蝦夷地経営に関する建白書を明治新政府に提出。慶応4年（1868）に五稜郭に置かれた箱館（現函館）裁判所の権判事（ごんのはんじ）となり、新政府軍の一員として箱館戦争にも従軍した。また、龍馬の再従兄弟（またいとこ）にあたる澤辺琢磨も箱館に渡っている。

坂本直寛（登さんの曾祖父）は自由民権運動で活躍し、高知県会議員を務めたキリスト教徒だった。後に政治活動から離れ、北海道北見の開拓に着手。同志と共に北光社（合資会社）という農場を設立し、明治31年（1898）には一家と共に浦臼へ移住。以後、開拓と伝道にその生涯を捧げた人であった。理想の実現を目指し幾度の試練を乗り越え、叔父・龍馬の思いを継承したともいえる人生だったようだ。現在、北見市郊外には北光社の記念碑や直寛顕彰碑などが並ぶ。北見市と高知市は1986年姉妹都市になり、様々な交流が続いている。

直寛の死後、一旦は長男の直道が6代目の家督を継ぐが、当時まだ20歳の学生で他に事情もあり、家督は長女・直意の婿養子弥太郎が継ぐこと



キャンパスに向かう直行さん

になった（七代目）。

直道は東京帝大を卒業し、南満州鉄道欧州事務所長（在パリ）を務め、日仏の文化交流に貢献。帰国後、昭和16年（1941）弥太郎の勧めで断絶していた龍馬家を相続。その頃、日米開戦に反対する意見書を旧知の松岡洋右外相らに送り、憲兵や特高の「要注意人物」となる。満鉄参与を辞任後は軽井沢に蟄居し、隣人だった後の首相、鳩山一郎と交流を深める。戦後の復興について語り、その構想は昭和20年11月の日本自由党結成につながった。

幕末の内戦を阻止しようとした龍馬と日米開戦に反対した直道。直寛も同様に権力に怯まず、世のため人

のために尽くす気骨ある生き様をみると、坂本家には共通するDNAがあるのでは？と思わずにはいられない。

父、坂本直行を語る

25歳の時に婿養子として坂本家に入った、七代目の弥太郎（登さんの祖父）は熊本県の出身で、三井物産に勤務後、独立して明治38年（1905）釧路で坂本商會を開く。後に札幌に移住し、牧場や農場経営のほかにもロブ製造の会社を営む実業家だった。大正2年（1913）、釧路での大火の時、龍馬の遺品の一部を焼失したため、弥太郎は刀や手紙、海援隊の資料等を安全に保管するべく昭和6年（1931）現在の京都国立博物館へ寄贈した。それらの遺品は後に重要文化財に指定されたほど貴重なものだった。

弥太郎は龍馬の顕彰活動に熱心であり、登さんによると「龍馬の家系だから」と家族に厳しい人だったらしい。その反動からか、八代目の直行さんは龍馬の家系であることを子どもたちに一切しゃべらなかつた。取材からも逃げ回っていたという。

「けれども龍馬が嫌いだった訳ではなく、自分は自分と想っていたからでしょう」と登さん。



「床の間に西郷南州と勝海舟の書が
かけてあり、客から訊ねられると説明
していたので、それを耳にして、祖先
に龍馬という人がいたんだ：そんな
だと子どもの頃、何となく分かりまし
たね」十勝の原野で育ち、祖父とも同
居しなかったためか、子どもたちは間
接的にルーツを知ったらしい。

弥太郎は息子が役人になることを
望んでいたが、直行さんは自分の道
を選択し、北海道大学農学部に進学。
山岳部創部と同時に入部、北海道内
の山々を片っ端から走破した。山と
草花を愛する直行さんは温室園芸を
目指して、卒業後は東京の園芸会社

に就職。2年間修業し札幌に戻った。
父との約束で温室経営の資金を出し
てもらはずだったが、都合でそれが
不可能になり、計画は頓挫。

そんな折、牧場を始めた北大の同
級生の誘いで、昭和5年（1930）
十勝支庁の広尾村に旅立つ。父は猛
反対、しかしここでも独立独歩の直行
さんであった。友人が経営する野崎牧
場で働き、家畜の世話や搾乳、放牧、
耕作、ハム作りまで牧場経営を実地に
学んだ。

そして昭和10年（1935）独立。
日高山脈に抱かれた、広尾の下野塚原
野に身一つで入植した。うっそうと茂

る柏林の抜根から開墾の第一歩が始ま
る。その開拓生活は想像を絶するほど
の厳しさ。入植後5年間の体験を直
行さんは「開墾の記」（復刻版が平成
4年北海道新聞社から刊）として昭
和17年（1942）に出版。折々に
直行さんのスケッチが挟まれたその本
は、ある種の感動なしでは読めない。
「人間とはこんなにも強いものか」と
思う。大雪に閉ざされ、牛馬は生き埋
めになりそう。飼料も水薪も食料も
底をつく。直行さんの家族や家畜を守
る格闘は命がけだった。骨がきしむほ
ど働いても楽にならない暮らし。そん
な中でも春を待つはやる気持、春を迎

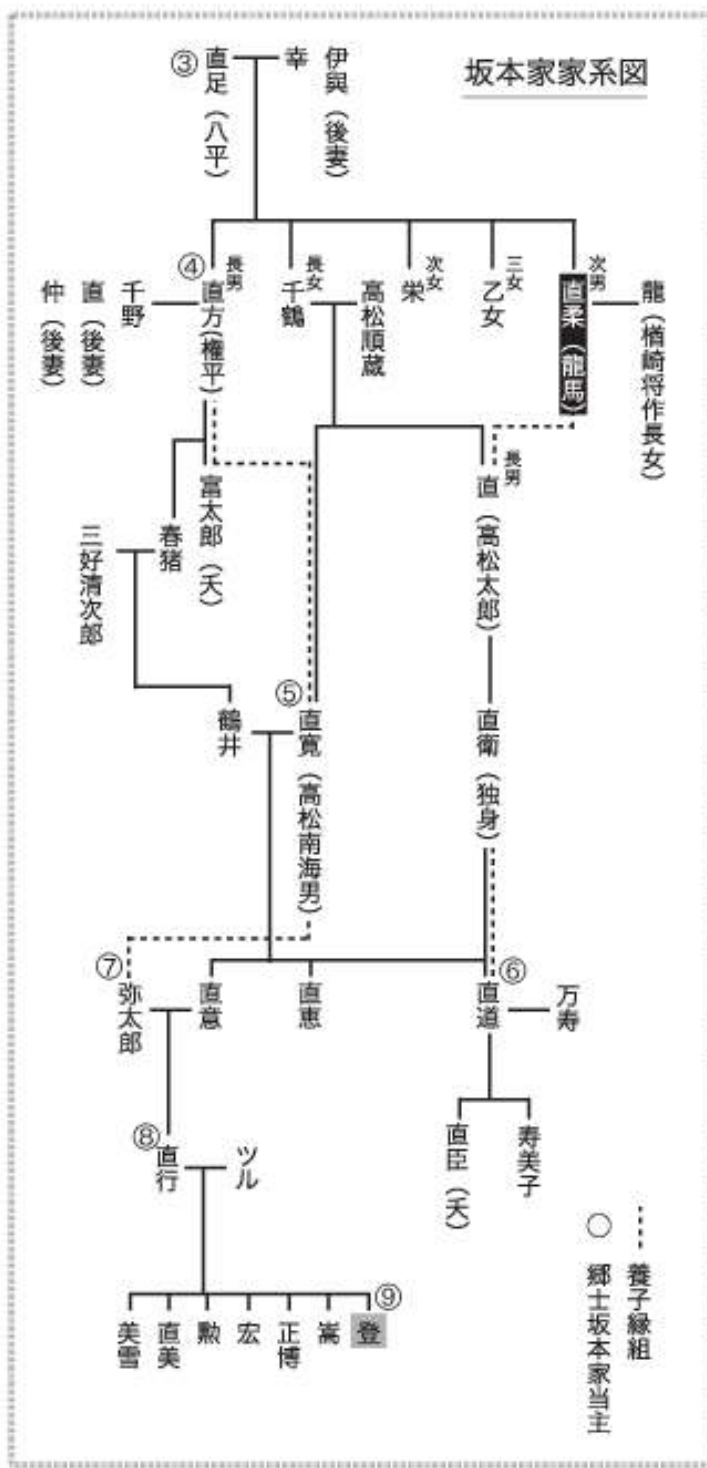
えた原野のすばらしい自然。妻ツルさ
んとの話が遠く離れたユーモアで綴ら
れている。「常に自然の美しさに感動
し、原野を愛した直行の精神力の強
さ、心のゆとりには今さら驚かすには
いられません」とツルさんは前書きに
記している。

「私は布団の上に雪が積もるような
馬屋の中で生まれました。両親が畑に
でている時は家の柱に帯で繋がれ、板
の間の継ぎ目に溜まったゴミや炉辺の
炭を食べたりしていたようですよ」と
ジョークまじりに話す登さん。ビール
瓶につけた乳首でミルクを飲み大きく
なった。ツルさんはこの原野で5男2
女を生んだ（三男の正博さんは親戚へ
養子に）。夫を支え、6人の子どもを
育て、93歳の今も札幌で健在だ。

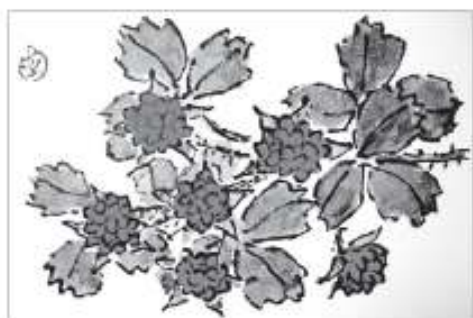
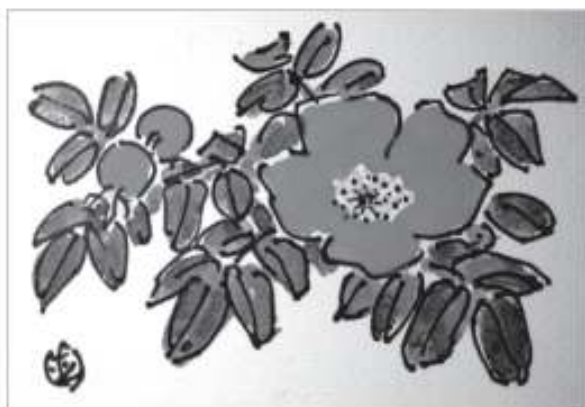
原野では子どもたちも大事な労働
力だった。牛馬の世話や薪割、中学時
代から自転車通学になると、登校時
には牛乳がいっぱい入った牛乳缶を自
転車に括りつけ、途中の集乳所を下ろ
し、帰りは空き缶を引き取ってくる毎
日。道立の大樹高校時代は18キロの
道のりを自転車通学。冬になると汽
車通学で豊似駅までの5キロはスキ
ーか徒歩で往復、帰宅は午後9時半過
ぎという生活だった。

直行さんは息子たちに跡を継がせ
たくて、農業科へ入れた。しかし卒業

坂本家家系図



直行さんが描いた花々
 (左)かたくり (中央)はまなし (右)なわしろいちご



後子どもたちは次々に原野を出ていった。直行さんが父の望みに沿わなかったように。登さんは東京の大学へ進学。以来東京暮らしである。

「オヤジは子どもたちが跡を継がなかったから、仕方なく画家になったんでしよう(笑)」

朝から晩まで15時間働いたあとでも、ストーブの焚火の明かりで本を読んでいた父の姿が記憶の中にある。貧乏のどん底にあってもスケッチをやめることはなかった。

ある日原野を訪ねてきた、武蔵野美術大学教授で彫刻家の峯孝さんとの出会いが画家へ転向するきっかけになる。30年暮らした原野と決別し、初めて電灯の下で夜を徹して絵が描けるようになった。札幌を皮切りに、東京でも1年おきに個展を開催。画家として大成を収めた。高知に帰るとは1度もなかったけれど、4年前生誕百年を記念して、「おかえり！直行さん—北海道から龍馬の子孫、初めての里帰り」と題して、高知坂本龍馬記念館で坂本直行展がロングラン開催され大好評を博した。『チョッコウさん』と呼ばれて親しまれ、「日本百名山」の深田久弥氏から「古武士のような」と表された父。登さんに言わせると、『日高のいごっそう』を貰った一生だった。

「龍馬ブーム」で大忙し

登さんは現在も自身で営む、ビル管理会社の仕事を続けている。神田まで電車通勤の毎日だ。しかし今年初めから放映のNHK大河ドラマ「龍馬伝」が始まると、世の中あげての龍馬ブームで周りが慌ただしくなった。本や雑誌類は200種類以上出版され、行政や商店街は龍馬関連のイベントでまちおこし。坂本家当主として、昨年函館にオープンした「北海道坂本龍馬記念館」の名譽顧問も務めている。

高知や長崎など全国各地で開かれるイベントやシンポジウムにもひっぱりだこで、週末はほとんど予定が埋まってしまふ。イベントなどで、勝海舟やジョン万次郎、西郷隆盛、近藤長次郎など幕末に活躍した志士の末裔に会うこともしばしば。もう1500人もの人々と名刺交換している。

「いろいろな人に会える、それだけ良かったことですね」

「龍馬伝」も「龍馬ファン」として見ているが、これまでに2回、NHKの掘り現場を訪ね、福山龍馬にも対面した。「実際の坂本家の人たちはどんな感じなのだろう」と福山さんも登さんに会いたがっていたという。

「あとで分かったのですが、私は福山さんと誕生日が同じ、2月6日なん

です」坂本家九代目と龍馬を演じる福山雅治さんが同じ日生まれ。これも偶然ではなく、何かの縁ゆえだったのだろうか。その折、「ホンモノ」に出会えた出演者たちの方から「一緒に写真を撮らせて」と登さんに寄ってきたというから可笑しい。

「龍馬は公文書ではなく、自分で手紙を書いたことでそれが残り、人間的魅力がアピールされていますね。平等と自由という思想が根底にあり、今の時代も色褪せない。龍馬精神が今の社会の閉塞感を打ち破ってくれるよう期待しています」

登さんには一男一女がある。長男の匡弘さんは八王子在住。そして二人の孫は男の子。十代目も十一代目も坂本家当主は安泰である。

9月にはこだいら雑学文化塾で「龍馬との出会い」と題して坂本登さんが地元で初講演。この機会を逃さずどうぞ。

こだいら雑学文化塾

9月26日(日)午後1時30分より

「龍馬との出会い」

小平市福祉会館 資料代百円

(問) 042(343)3649

基太村